

公述人配付資料

総合治水対策（大規模洪水・超過洪水）

ハリケーン・カトリナ災害に顕れたように、現状の治水計画や洪水高水を上回る洪水が起こることを前提とすべきであり、その際の対策について、検討、明記すべきです。住民の避難計画や、被災者への精神的なケア、復興計画などを加えるべきです。

環境（水棲動植物）の目標値の設定とそのため整備

○昭和 50 年（1975）完成の早明浦ダムと池田ダム以前の環境データの収集

○昭和 50 年以後の環境データの推移

○今後の環境各目標値の設定

一般にダムが設置されると、ダム湛水による流れの消失、下流は人為的な流況操作や水質の変化により、水棲動植物は、絶滅、激減、減少する。中には、新しい環境に適応した種が繁栄する。

日本の河川の象徴ともいえるアユについていえば、自然や人工原因による減少に対して、従来は、人工種苗とその放流による増加を図ってきたが、近年、各地で天然アユ回復運動が盛んになっており、産卵地などの整備や、人工物の改築、ダム運営の改善により、成果をあげている。

吉野川の良い環境を維持、さらに改善

○スポーツなどの河川利用を考慮して、早明浦ダム（と山崎ダム）からの放水の変動を少なくしたり、昼間の河川水量に留意する管理を行う。

吉野川全域で、遊漁、カヌーやラフティングなどのウォータースポーツ、遊泳、川辺での活動など、活発な利用が見られ、地域住民にとって、大きな福祉効果をもたらしている。加えて、流域外からも景観や体験の観光を目的とした多くの人の流れがあり、大いなる観光資源として活用されている。

早明浦ダムからの長期濁水（増水と濁水）、低水温対策

21 世紀は、水資源を争奪する世紀だと、言われている。吉野川の資源をいかに保ち、より良好な自然環境に改善することができるかどうか、整備計画により深く明記、または、検討課題として打ち出すべきではないか。

各水利権などの検討と見直し

○長期濁水時の早明浦ダムからの冷水濁水放水を軽減するために、高知や愛媛への各分水の一部を水系に戻す。

○ダム非洪水期にも、最大級の洪水が来ている。洪水期・非洪水期の見直し

○発電容量の洪水容量への一部、移転

更なる情報公開

現在の WEB による公開は、ごく一部。要望に応じて情報公開を拡大し、啓蒙につとめる。

吉野川水系全体の管理体制

原案では、「吉野川」を対象としながら、実際は、国の直轄区間のみの内容です。県の管理区間や、流域自治体、関連する電源開発、電力各会社などとの連携を明確にしてください。

検討部署、委員会の常設

河川管理者、学識者、地域住民、地域外市民（吉野川ファン）などを構成員とする、常設機関を設置し、定期的に、問題を討議し、河川管理や整備に提言などのフィードバックを行う。